

ボタンをかけてあげる人にはならないこと。

～私が出会った言葉でけっして忘れる事は無い言葉～

村の学校の短い2学期が始まりました。短い中学生活を楽しむ3年生で私がずっとやりたくていたフェルトとジッパーを使ってペンケースを作りました。中学生に人気がある授業は裁縫です。男女問わず「ソーイングがやりたい。」とうれしい事を言ってくれるのです。何度指導しても長い糸を腕めいっばい伸ばしては折り曲げ縫って行くのです。縫い目は細かったり大きかったりとそれぞれですが、縫っている時の顔も完成した作品を見る顔もみんな良い顔をしているのです。そうした中、周りよりも少しばかり縫うのが遅い子どもに対して手を貸したいと思ったことが今回ありました。すぐさま差し出した手を引っこめました。「私、ボタンをかけてあげる人になっちゃう」そう思ったのです。このボタンをかけてあげる人の話しをスプートニクの寿限無ブログだったのか？SNSだったのか？忘れてしまいましたが以前書いたことがあります、今回改めて書きたいと思います。今から約20年、障害児や養護施設や母子保護シェルターに入っている子どもたちが安心して社会参加できる目的で設立された団体に所属し、就学前の自立発達遅延児が通う施設にボランティアで行っていたことがあります。これはこの施設の子どもたちを TDL に引率するために、事前に子どもとマッチングされお互いの慣れの為に通っていたのです。時は日本中を震撼させた大阪の学校で起きた事件の頃です。たとえ所属がはっきりとしているボランティア団体であっても外部者への対応が厳しい中で、受入れを賛成してくれた先生がいました。その先生からは、自分の気持ちが伝えられない子どもへの対応はじめ色々な事を教えてもらいました。その中でも常に子どもを接する時に忘れずに持ち続けているのが「ボタンをかけてあげる人にはならない。」という事です。なかなかボタンをかけることが出来ないでいる子どもに対し、じれったくなり手を貸したくなります。「ここにボランティアで来る人の大半は、そうした子どもを見てボタンをかけてあげてしまうんです。國分さんはそれをしないで待ってくれる人だと私は思うんですよ。」そう先生が言いました。これは、発達の遅延関係なく子どもと接する時にはとても大事な事だと思います。見ていてじれったくなり、ついつい手を貸したくなってしまふ事は、今回の事のみならずいろんな場面であります。ボタンをかけてあげるのではなく、子どもが自らの手でやり遂げるのを待つ大人でこれからもあり続けたいと思います。※この文(想い)をどこかで書いているのですが未だに思い出せません。この色々な事を教えてくださった先生もお会いしたい人の一人なのです。

★國分 敏子 ガーナ挨拶 No.58 29/04/2023

